

序

2015年度の日文研海外シンポジウムは、二部構成で行われた。第一部は日文研を会場として、2015年6月30日から7月2日にかけて開催され、第二部は2015年11月13日にハーヴァード大学において、同大のライシャワー日本研究所との共催で開かれた。テーマは、前者が「失われた20年と日本研究のこれから」であり、後者が「失われた20年と日本社会の変容」である。時間と場所を異にしていたとはいえ、ともにいわゆる「失われた20年」と呼ばれるバブル崩壊後の90年代以降の日本社会の長期的低迷と閉塞感を根本的に問い直し、そこからの打開策を探ろうとすることを目的とし、当初から一貫したプランのもとで準備が進められた。

もともとこのテーマでの研究は、当時日文研に国際交流基金フェローとして滞在されていたハーヴァード大学のアンドルー・ゴードン教授が手がけていたものである。「失われた20年」と形容される日本社会の喪失感の所以をグローバルな観点から再検討しようとするゴードン教授の所説に刺激を受け、瀧井がゴードン教授と共同研究を開始した。それは、日文研プロジェクトにも採択され、所の内外の研究者を交えた学際的な研究会が数回もたれた後、その総括のようなかたちで国際シンポジウムを開催しようと話が進展していった。偶然、同僚の坪井秀人教授も「失われた20年」を主題として『日本研究』にて特集を組むことを企画されており、坪井教授の協力も得て、複数のプロジェクトのジョイントとしてシンポジウムを開くことができた。

かつて、やはりハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲル教授によって、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ということが唱えられた。高度経済成長を享受し、空前の経済的繁栄を体験した日本の社会はいささか狂騒の様相を呈していたが、振り子が振れたように今度は「失われた」と日本人は自縄自縛に陥っている。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の風潮のなか創設された日文研が、30年を経て今度は「ロスト・ディケーズ」に対峙しなければならなくなったのは、一体どのような因果なのか。

そう書くと、お定まりの悲観論のように響くが、実際のシンポジウムにおいては、この間の日本社会や文化のダイナミックな変容に対して冷静な分析が加えられると同時に、時として積極的な評価もなされた。その個々の成果を本書から読み取っていただけることと期待している。

最後に、このシンポジウムの実現にあたって力になってくださったゴードン教授と坪井教授、そして海外交流室室員として実際の運営に協力をたまわった郭南燕准教授、さらに事務方として多大な支援をしてくださった日文研の春木淳氏と輝川尚子氏、ハーヴァード大学ライシャワー日本研究所のStacie Matsumoto氏とYukari Swanson氏に心よりお礼申し上げたい。本成果報告書の編集を担当してくださった日文研出版編集室の伊藤桃子氏にも、深甚な謝意を表したい。

2017年1月26日

瀧井一博